
カグヤ姫と占い師

佐和月そら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カグヤ姫と占い師

【Nコード】

N9641F

【作者名】

佐和月そら

【あらすじ】

ルーフ王国王位継承者であるカグヤ姫は、母のダイリン王妃から常日頃結婚を急かさせるお年頃。ある日、またもや結婚の話を持ち出され、王妃から占い師に結婚運を占ってもらおうよう厳命が下る。しかしそう簡単に結婚したくないカグヤ姫は、護衛隊長のガイにその占い師をどうにかするよう命令するが……プリンセスカグヤのドタバタコメディ小説です。雰囲気はライトノベルな感じです。

1、すべては王妃の登場ではじまる。

いとかしこきく、いとかしこきく、しらさぎのくと先触れ女官三人が、部屋の壁につま先をそろえて直立し、真っ赤にぬったくつたカエルのお顔みたいな唇をOの字にひらいて、突如声上げをしはじめたのは、ちょうど城の外からゴゴーンと昼時を知らせるにぶい鐘の音が聞こえた頃だった。

自室で刺繍をしていたプリンセスカグヤは、ラベンダー色の糸がついた針をとめて、何かと丸いアーチ状の扉に目をやった。扉は百年前の大地震でもヒビ一つ入らなかったすぐれもので、外では王女つきの護衛兵たちが扉の前に陣取っている。主人の許しがなければひらかないはずなのだが……なにやら靴の踵の大群が近づいてくるのを聞き取るや、綺麗な半月を描いた眉をしかめて、手元の刺繍に目を落とした。

ルーフ王国の西ウインスレッタの村は、伝統ある絹地の生産地である。品質が良く手触りもすべすべしているので、メイド・イン・ルーフの絹は世界各国の王侯貴族たちを飾るファッションの必需品になっている。その絹地を使って、世界の指定古都のひとつである旧大陸のアレク・サン・ドーリアからわざわざ取り寄せた七色の糸、通称王妃の虹の糸を銀の針に通し、午前中は縫いものに没頭していた。

銀製の留め金で絹地を固定し、ちくちくと針でぬっていた図柄は、ラファロン王家の紋章である火の鳥と不死の山で茂る葉だ。糸はその名のとおりに光り輝き、真っ白な絹地の上で、コバルトグリーンの葉っぱとスカーレットの鳥が躍動している。あとは鳥の飛翔している翼を赤く染めれば出来上がるのだが……カグヤ姫はぎりつと奥歯を噛んで、針を絹地にぶつ刺した。まったく、少しはあたくしのお

稽古事の時間を大切にしていたきたいのに！

苛立ちを隠さず、手ぶりで命じれば、もう王女づきの女官たちは、カグヤ姫のまわりを片付けていた。脚が蔓の形に刻まれたテーブルは円卓である。その上には、オレンジ、レッド、イエロー、グリーン、ブルー、パープル、ラベンダーの各七色の糸が燦然と光っている。糸自体は普通の細長い絹糸を染めたもので、それが発色しているのである。

世界の観光都市としても名高いアレク・サン・ドーリアには、あやしい秘術を扱う魔術師たちが、旧大陸と新大陸からやって来る金持ちの観光客相手に商売をしていて、その昔々某国の何某のマリー王妃がお忍びで訪問すると、次のような依頼をしたという。

「わたくしが光り輝くように、なんとかしてちょうだい」

当時ナンバーワンの魔術師だったヴェルドランが、美貌で名高かった王妃の流し目とテーブルに積み重ねられた金貨の山に、つい頷いてしまい、それから三日三晩、飲まず喰わずでもてる秘術を尽くした結果、光り輝く糸をあみ出したのである。件の王妃はその糸でドレスをつくらせ、王国一の美女を決める舞踏会に胸張って登場したのだが、別の意味で大変目立ってしまった。その夜舞踏会に出席した貴族の一人は、高級ゴシップ紙「ボンジュール」のインタビューに、「王妃様はまるで、新大陸で使われているという電球のつぎはぎのようでした」（某ボンパデュール伯爵夫人）と告白。以後電球王妃などというひどい呼び名をつけられてしまったのである。それ以来ファッションの類に使われることはあまりなくなったが、アレク・サン・ドーリアの特産品として、王妃の虹の糸は売られている。

閑話休題。

若い侍女たちはテーブルに散らばっているこの糸も片付けようとしたが、カグヤ姫は首を横に振った

「このままで、お迎えます」

「ですが、姫様。もうご昼食時のお時間です」

侍女頭のマツバ・ブーリン女官長が、聞きわけのない子供を叱るような口調で言った。ブーリン女官長はカグヤ姫が生まれたときから仕えている側近である。己の仕える王女の成長をあたたく見守ってきたのだが、いまだに説教ぐせがぬけない。

だがカグヤ姫はさらに首をふった。

「食事はあたくしが命じてから、運んでちょうだい」

あたくしはもう鼻水やヨダレをたらした子供ではないのよ。カグヤ姫は毎度思うのだが、絹とビロードのドレスで身を飾っても、ブーリン女官長の目には鼻水をたらしたお子様カグヤが映っているらしい。

「あたくしの言うとおりになさい」

権高に命じると、ブーリン女官長は眉間に縦じまをつくり、腰に手をあて、子供を叱るような態勢になった。まるで服を着た大岩が、プリンセスカグヤのそばに陣取っているような格好である。だが、扉の外で護衛兵たちの整列する気配がして、壁に並ぶ先触れ女官たちが大きく息を吸いあげると、ブーリン女官長はお側付きの侍女たちをカグヤ姫の背後に一列に並ばせて、自分もその横に立った。

「いとかしこき、いとかしこき」

先触れ女官たちが、再び声をあげる。王家の人間が登場する時に言いまわされる文句である。

カグヤ姫は仕方なさそうに立ちあがった。同時に、扉が左右にひらく。

「しらさぎの、ダイリン王妃」

現れたのは、全身白いドレス姿の女性だった。

たいそう美しい女性だった。身につけている衣装もその美しさを引き立たせるもので、まず首回りを隠した襟元は、白いレースで縁どられ、両腕の肘からは手の指先まで長いレースが垂れている。蔓草模様の白いレースだ。豊かな胸元は赤と金の糸で細かな刺繍がされ、膝あたりから足の踝まで、ドレスのふちを同じ模様のレースが何枚も縫いつけられている。そのドレスは長身で細身の体型によく

映えていて、飾りげのないシンプルなづくりが、かえってその身分にふさわしい気品さをかもしだしていた。ひとつに結びあげた黒髪の上からは、薄い絹のベールを腰まで垂らし、飛翔する黄金の鳥の冠が頭を飾っている。

国民からは白鷺の宮と称えられるダイリン王妃は、につこりと笑みを浮かべながら、娘のもとを訪れた。

「まあ、姫、ごきげんよう」

「母上様も、ご機嫌うるわしく」

カグヤ姫は王国跡取りの王女らしく、優雅なしぐさで頭をさげた。
「あら、お稽古事をやってみましたの」

王妃はテーブルに散らかっている糸や刺繍に気がつくのと、頬に手を添えながら嬉しそうに微笑んだ。

「まあ、姫もようやく、たしなむようになったんですね」

「ええ、あと少しで出来上がるところでしたの。これが終わってから、食事にしますわ」

プリンセスはぬけぬけと言った。糸や布地は母親に見せるためにわざと置いたのである。もちろん、さつさと母親を追い出すためだ。
「まあまあ、熱心ですわねえ。わたくしは嬉しいですわ」

王妃はにこにこしながら、プリン女官長が引いた椅子に腰かけろ。カグヤ姫も少々顔を引きつらせながら、再び椅子に座った。相変わらずな王妃に、もう早速疲れを感じてしまった。

「まあまあ、まあまあ、これは王家の紋章の図柄ですわねえ。姫ったら、お上手になられましたわあ。昔は黄色い花を刺繍するにも、枯れてへなちよこの葉っぱのようになりましたものねえ。本当に姫は成長なさったわあ」

「ええ、全くですわ、王妃様」

プリン女官長は手振りで若い侍女たちに指示をしながらも、如才なく相槌をうつ。

「幼少の姫様は、それはもう暴れん坊でしたから。花瓶は投げる。椅子は振り回す。着ているドレスは引きちぎる。わたくしはもう、

いとかしこきルーフの姫様をお育てするのではなく、海の彼方の怪物を躰けるのかと眩暈がしましたもの」

「そうよねえ、ブーリン女官長。あなたにはとても感謝しておりますよ。なんといつても、お若い頃に世界女子力自慢選手権で優勝したんですもの！あなたでなければ、いたずら者の姫を逆さにひっくり返して、おしりぺんぺんなんて出来ませんでしたわあ。あれは見事でしたよ」

「まあ、ありがとうございます。でもいつぞやはびっくりしましたわ。姫様が大切なお稽古事をすっぱかされたので、部屋で遊んでいた姫様をえいっとひっくり返して、いつもどおりにぺんぺんしましたら、姫様が鼻血を垂らしてしまわれて。まあわたくししたら、あの時は腕によりをかけすぎましたわ」

「本当にねえ。懐かしいわねえ……」

ダイリン王妃とブーリン女官長が昔話にひたっている目の前で、カグヤ姫は女官がそいだグリーンティーに口をつけた。王国の南にあるバックリイは、お茶の生産地で知られている。ルーフのお茶といえば、外国ではバックリイと呼ぶほどだ。そこは山に囲まれた平野に茶園が広がっていて、収穫時期になると、摘まれた葉は毎年王家に献上されている。ここの領主はイエンターゼ家で、遠い昔、ふたりの王子たちの間で後継者争いが起こり、新国王となった兄からバックリイへの流罪を言い渡された弟王子とその一族の子孫たちが暮らしている。当時のバックリイは、稲も実らず種も死ぬという不毛の土地だったが、一族の奮闘で茶の栽培に成功。のちのちになつて、王宮への伺候も許され、あらたに侯爵の位を授かっている。

そのイエンターゼ家が例年のごとくお茶を献上したのは、つい三日前。今年初物のお茶は、気候が良かったせいか、非常に香ばしい匂いを醸しだしていて、ひとたび口に含むと、熱くて濃い湯の味がじつくりと喉を満たしてゆく。プリンセスカグヤは山のように積まれたお茶の葉を傍らにして口上を述べたイエンターゼ侯爵を思い浮かべた。

「……わが茶は先ごろ、ロイワンの都で催された品評会で、名誉ある特別賞をいただきました。スペシャル審査員であるイエン老人が、審議の場で一言バツクリイ！と叫び、煙のごとく消えてしまったそうで、まあそれはよろしいのですが、これからわが茶を売り出すときは、あの茶にうるさいというイエン老もお墨付きとの文句をつけるとよろしいのでは……ふふふ……」

見事な巻き毛の黒髪といつも人を喰ったような表情を浮かべるバツクリイの領主に、カグヤ姫は白磁器のカップの丸い取っ手を指でつまんだまま、ふんと鼻を鳴らした。まったく、シンはいつまでもたつてもイタズラ好きの子供なんだから。あたくしが昔、甘いお茶だよ勧められて、化け物のような味の青汁を飲まされたことは忘れられないわ。その後お腹をこわしたこともね。いったいいつロイワンの都に出品したっていうのかしら。バカなお父様は、それはすごいでおじやるなんて感心していらっしやっただけけど、イエン老人は桃源郷にいるという伝説の仙人よ。ロイワンの都に知り合いでもいたのかしら。シンったら、また……

プリンセスカグヤの取っ手を持つ指が小刻みに震えている。一生懸命頭のなかで別のことを考えようとしているのだが、両耳からは否応なしに目の前の会話が流れてくる。

「……それでね、ブーリン女官長。あの時姫ったら、白いパンツ一枚で走りまわって、そこら中に体当たりしては宮殿の物を壊していきましたのよ」

「んまあ、さすがはやんごとなき姫君ですわ。わたくしも今思えば、姫様をお育てしていて、よくもまあ血圧が上がってぼっくり逝かずに済んだかと、ほっと胸を撫でおろす思いですもの」

「ほんとにねえ。あの頃の姫ったら、ユルネイの最高傑作のひとつである【霧隠れ】の刀を振り回したり、ドレイドンの貴重な絵画【もみじ拾い】に本物の紅葉の葉っぱを貼りつけたり、ガパナーチュにデザインさせたわたくしのドレス【ブランシュ】をハサミで切り裂いたりと、めちゃくちゃでしたものねえ……」

思わず、カグヤ姫はげげほと咳き込んだ。マサムネ・ユルネイはルーフ王国の三大刀鍛冶職人のひとりで、何本もの名刀を生み出している。【霧隠れ】はそのなかでも特に有名な刀で、ユルネイが三日三晩飲まず喰わずで作りつづけたという逸話がある。ババリーシュ・デイ・ドレイドンはノスタルジー絵画主義の代表で、他にも【さかな釣り】【キノコ狩り】など代表的な名画がある。最近のオークションでは、スケッチ一枚に当地の貨幣で五千万ロンドの値がついたことが話題になった。ドルドル・ガパナーチュは世界のファッション界をリードする有名なデザイナーで、毎年おこなわれるプロヴァンス王国主催のファッションショーでは、世界中の貴婦人方から熱い注目を受けている。彼の作品【ブランシュ】はダイリン王妃をイメージにして作られ、それを王妃が身にまとうて現れると、ハラーショ！ハラーショ！手を叩いて絶賛したという。これらはどれもこれも大変価値のある代物なのだが、もちろんカグヤ姫にそんな無礼を働いた幼いときの記憶はなく、飲んでいたバックリイ茶を吹き出さずにはおれなかった。

「あら、姫、大丈夫？」

王妃は心配そうに娘の顔を覗き込む。その美しい顔立ちに悪意は微塵もなく、カグヤ姫は侍女が差し出した絹のハンカチで口元を拭くと、改まったように咳払いをした。

「それで、母上様、あたくしに何か御用でも？」

母上様が天然ボケなのはわかっていているわ。あたくしの思い出話は、目の下の小皺のように刻まれてしまっているのね。幼い頃の武勇伝のたぐいは、耳にタコができるぐらい聞かされているプリンセスである。たしなめるようにしかめっ面をするプリン女官長を無視して、話をすすめた。

「わざわざいらっしゃるなんて、なにかありましたの？」

「……ええ、姫、そうね」

王妃は話のこしを折られても気を悪くした様子もなく、にこにこと笑いながら、ブルーリン女官長が置いた白いティーカップを手にとった。

「あら、これはバックリイの新茶ね。いい匂いがすること」

「この前、シンが献上したものです」

「あらあら、イエンターゼ侯爵ね」

謁見の場にいたはずの王妃は、一口飲むと、頬に手を添えて、ほおつと息をついた。

「相変わらずまるやかですこと……この間、コノハ様にお会いした時に、今年の出来具合はどうかお聞きしましたの。そうしたら、予想以上の豊作で、めまいがするっておっしゃってましたわあ。ほら、お値段の関係でね」

王妃は庶民くさいことを口にして、優雅に笑う。コノハ・ド・エリアーゼ夫人は、イエンターゼ侯爵の母であり、ダイリン王妃のお茶飲み友達である。

「それでね、姫。わたくしとコノハ様がお話をしていたら、タチバナ様とサクヤ様がいらっしゃったの」

これまたどちらも由緒ある名家の御夫人方である。そしてこれま

た王妃のお茶飲み友達だ。

「そうですか」

バックリイ茶を飲みながら、プリンセスは静かに頷いた。なにやらイヤな予感がしてきた。

「それでわたくしたち四人でテーブルを囲んで、つれづれにお話をしていたの。お天気のことや、お料理のこと、最近のデハーネ伯爵夫人のご衣裳のこと、ロンディー男爵のお馬のこと、ジャルデン將軍の白いお髭のこと……そうしたら、ふいにサクヤ様が手をパンと叩かれて、『いやだわ王妃様、わたくししたら、大切なことをお伝えするのを忘れてましたわ!』って、叫びましたの」

王妃は邪気のない笑顔のままで、話をつづける。

「サクヤ様がおっしゃるには、つい最近、仲のよしいパース伯爵夫人とお会いしたんですって。パース夫人は姫も知つてのとおり、パーティーの大好きな方で、夜毎馬車に乗ってお出かけになるものだから、ついに伯爵が怒つてご領地にある別荘へ閉じこもってしまった、とか、色々なお噂のある愉快なお方ですけど、デネネット侯爵夫人が主催なさった夜会でお会いした折に、様々なお話で盛りあがったんですって。その時にね、姫、面白いことをお聞きしたんですって」

袖下から取り出した扇をひらくと、ルーフー高い山に住まう幻の鳥「トーキ」の純白の羽をはためかせて、にっこりと笑う。その満面の笑顔に、カグヤ姫は我知らず引いてしまった。王妃の機嫌がいい時は、必ずウラに何かがあるのである。

「パース伯爵夫人がおっしゃった面白いことって、何だと思う? 姫」

「さあ」

「それはね、姫」

おほほと軽い笑い声をたてて、

「今、若いご令嬢方の間で、占いが流行っているんですって」

「はい?」

何が飛びでるかと思っていたプリンセスは、ティーカップを持つ

たまま、鸚鵡返しに聞き返す。

「占いですか？母上様」

「ええ、そうなの。占いな」

王妃もゆつくりと繰り返して、ふわふわの扇のはしから満足そうな眼差しを見せる。

「爺やがアルバイトでもはじめたのですか？」

王宮付きの占い師であるハレ・メイは、日頃からお手当が少ないと文句を垂れている齡二百歳超の美少年である。カグヤ姫が知っている占い師はこの爺やだけなのだが、王妃は小さくかぶりを振った。

「違うわ、姫ったら」

おほほと笑いながら扇をふる。

カグヤ姫は怪訝そうに眉をしかめた。王妃の笑い声が妙に気になるのである。母上様はいつたい何をたくらんでいるのかしら？

「はつきりおっしゃってください」

遠まわしな言い方は大嫌いなプリンセスである。二つのティーカップにバツクリイ茶を注いだブルーリン女官長は、腰に手をあてて叱る体勢になっているが、それは見ないことにした。

「ええ、そうね」

王妃はかるやかに扇をふりながら、薔薇色の唇を優雅に動かす。

「姫もご承知かと思うけれど、ルーフは長い間、他の国々とおつきあいがなかったでしょう。けれど、先々代のスコーン女王様が、それではだめですとおっしゃって、世界のみなさまとおつきあいをはじめましたわねえ。それから数十年が経ちますけれど、東の果てに浮かぶ小さな島を訪れる物好きなお方は、残念ですけど、あまりいませんわあ。それこそ世界見聞録を書いたM・Pや、ハリー・ジュリアスのような大冒険家でないとね。けれど、強く雄々しい冒険心をいだいたお方が、はるばる海を渡って、このルーフへいらしたのよ、姫」

「それが、占い師ですか」

なかば呆れたようにカグヤ姫が突っ込むと、王妃は自信たっぷりに頷いた。

「ええ、占い師」

「まだ意味がよくわかりませんけれど」

「だからね、その占い師にうらなってもらいなさい、姫」

王妃はあつさりと言った。

「サクヤ様がおっしゃるには、とても腕のよろしいお方なんですって」

「……ちょ、ちょっとお待ちになって、母上様」

慌ててカップを置いて、ゴホゴホとむせる胸を押さえる。

「いったいなんだってまた、そんなお話をあたくしに……」

「まあ、決まってるじゃないの、姫！」

それまで手首の運動よろしく振っていた扇を、ぴたりと止める。

「姫、あなたおいくつになったと思ってるの？この間のお誕生日で、十七歳になったんですよ、十七歳！」

穏やかだった笑顔が、突如嵐にでも遭遇したかのように変わっている。

カグヤ姫は、うっと詰まった。次に飛び出てくる言葉がわかったからだ。

「姫ったら、いったいいつ結婚するおつもりなの！」

やっぱりきたかと、プリンセスは唸った。目下母親の最大の関心事は、自分の娘の結婚なのである。

「わたくしが国王様のもとへ嫁いできたのは、十五歳の春なのですよ。その翌年には姫をお産みしたのに、姫ったら、もう十七歳になっちゃったのですよ。これはとても重大な問題なのですよ。わかっているの、姫」

「ええ、まあ」

母上様にとってはね、と苦々しく思いつつ、プリンセスは答える。

「でも、父上様からは急ぐことはないと言われましたけれど」

「んまあ、国王様はのんきなお方だから、そんなおバカなことをお

つしゃるのよ。なぜなら姫、このルーフの王位を継ぐのはあなただけ。王位継承者はカグヤ王女だけなのですよ。明日にでも国王様がぽっくりいったら、すぐにでも女王として戴冠しなければならぬお立場なのに、そんなお気楽なお仕事をおっしゃってどうするの？」

ダイリン王妃はテーブル越しに身を乗り出し、まるで明日にでもルーフ王国に重大な危機が訪れるかのような真剣さで、あ然としているカグヤ姫に詰め寄る。

「それにね、姫。わたくしが王子のひとりでも産んでいれば、こんな口から泡を飛ばして姫に説教することもありませんでしたわ。けれど、わたくしはもうお子を産めませんの。姫をお産みしたあと、産めなくなりましたの。残念ですけれど……」

「なんておかawaiiそうな王妃様！」

プリン女官長がどこから取り出した白いハンカチで目頭を押さえている。だがカグヤ姫は、ふんと鼻を鳴らして、深紅の羽の扇を取り出すと、派手に音をたててひらき、これ見よがしに扇いだ。国王の古き友人であり宰相でもあるダイ・ミヤーンがこそつと教えてくれた話では、カグヤ姫を産んだあと、王妃は「もう痛い思いをするのはイヤですわ！」と泣き出し、王妃の弟であるブルグワント公爵が「あんた、お姉さまを殺す気ですか！」と国王の首を絞めんばかりに詰め寄ったので、それではもうよろしいということになったらしい。それなのに何を言っているんだかと白けてしまった。

「それにね、姫」

ダイリン王妃はプリンセスの反応がいまいちなので、仕切りなおすように話をつづける。

「姫の幼い頃の許婚だったエイドを覚えていて？」

「ええ」

「この間、結婚したのよ。ママス男爵のご令嬢とね」

言われなくてもプリンセスは知っていた。エイド・ランギー・ド・ブルグワントは従兄弟であり、幼い頃の許婚であった。が、初めて対面した時に、プリンセスに花瓶を投げつけられ、頭を負傷。それ以来、プリンセス恐怖症になり、泣いて拗ねてこねた結果、婚約解消となった。

「めでたいことですわ。ハナは淑やかでたおやかなレイディと名高いですもの」

カグヤ姫は屁とも思わなかった。だから何？という心境である。花瓶を投げつけられたぐらいで腰のぬける男など、あたくしが願うさげだわ！

「そうねえ、めでたいわねえ」

王妃は無念そうに相槌をつつた。エイドは甥にあたり、婚約話も王妃の意向だったのである。

これで話は終わるかしら、とプリンセスは期待した。だが、どこい王妃は簡単に引き下がらなかった。

「でもねえ、姫、あなたが結婚しないと、とても困る者もいますのよ」

それは母上様でしょうと、カグヤ姫が内心突っ込みを入れるが、王妃は体をねじって振り返り、ずっと部屋の片隅で直立している若者へ話を振った。

「ねえ、ガイ。そうでしょう」

ガイと呼ばれた若者は、無言のままその場で片膝を床につくと、右腕を手前に差し出し、頭を垂れた。これは貴族の男たちが一般的に使う答礼で、利き腕を差し出すことで、あなたのご随に、という意味なのである。

「ほら、見なさい！」

わが意を得たとばかりに、王妃の口調に熱弁がもどる。

「ガイは姫の護衛隊長で、幼なじみよ。さすがの姫も知らないはずはないと思いますけれど、王子王女付きになった者は、主が結婚するまで自分も独身を貫かなければなりませんのよ。おお、なんて、かわいそうなガイ！あんなに愛らしい許婚がいるのに……」

白い扇を口元に引き寄せ、恨めしそうにプリンセスを見やる。けれどカグヤ姫は負けじと鳥がばたつくような音をたてて、扇を振った。まったくガイったら。再び直立不動の姿勢のとなった若者を睨みつける。今日日の母上様に、あんな態度を見せても本当の意味が通じるわけがないでしょう。今の男どもは、どうでもいい時にああいふ仕草をするんだから。

「わかつているの、姫」

「わかつております。でもそれはあたくしの責任ではありません。あたくしは一言も自分に仕えるようガイに命じた覚えはありません。物心ついたときには、ガイは常にあたくしの傍らにいました。それがかわいそうとおっしゃるのなら、ただ単にガイは運がなかっただけなのでしょう」

「んまあ……」

ブーリン女官長がカグヤ姫の頭上で絶句している。あたくしはもう鼻水やヨダレをたらしているだけではないのよ。カグヤ姫はたたみかけるように言った。

「だいたい母上様、結婚、結婚、とおっしゃいますけれど、あたくし結婚をしないとは一言も申しおりません。ただ、自分の一生の伴侶であり、ルーフの未来の女王の夫になるのですから、じっくりと時間をかけて見定めたいとお願いしているのです。そんな早馬を競うようなことをして、間違った馬でも選んでしまったら、おそらくあたくし不幸になって暴れてしまうかもしれませんわ」

「そうねえ」

と、王妃はなぜか涼やかな笑みを頬に張りつける。

「姫は暴れん坊王女でしたものねえ」

そういう意味じゃないとプリンセスの額に青スジがひかる。

「でも、姫のおっしゃるとおりかもしれませんわねえ」

ダイリン王妃はまるで荒れていた海が突然静まったかのように落ち着いて、物分りのよい母親みたく娘の言い分におつとりと頷いて見せる。

「わかつていただけました？」

「わかりましたとも」

笑顔で首を縦に振るが、カグヤ姫は小さなため息を深紅の羽根に落とした。本当にわかつていたら、毎度毎度娘の部屋を訪れては、ケツコンケツコンと連呼なさらないでしょうねえ。

「それでは、姫。お邪魔しましたわ」

ちなみにまだテーブルには王妃の虹の糸が散らばっているのだが、ダイリン王妃はそれらを目にひとつひとつおさめると、扇を閉じて、のんびりと立ちあがった。

「ではね、姫、三日後に踊りの間でお会いしましょう」

「……えっ」

カグヤ姫は腰を上げながら、訝しげに聞き返す。

「三日後に踊りの間って、何のことですか？」

「あら、先ほど言ったでしょう、占い師にうらなってもらいなさいって」

ええっ！と抗議の声をあげるプリンセスに、王妃は非常にあてやかな微笑みを向けた。

「姫の結婚運をうらなってもらえば、早くすばらしい相手が見つかりますわ！姫も時間をかけてわざわざ見つける手間も省けますのよ。サクヤ様のお話では、姫と同じ年頃のトークン伯のご令嬢の結婚運をうらなったら、その二日後にお相手が見つかったんですって！本当に素晴らしい占い師のようですよ！ぜひともうちの姫も占ってもらいませんとね。国王様もそれは楽しみになさっていますわ。三日後の昼時の鐘が鳴る時刻に、踊りの間でうらなってもらいますからね。姫もお楽しみになさっていてね」

「……は、母上様」

ちよつとお待ちになってと追いつがるカグヤ姫には、おほほほほと勝利の勝どきのような笑い声を残し、王妃付きの女官たちを引き連れて出てゆく。先触れ女官たちが、「いとかしこき、いとかしこき、ご退出」と叫び、ブーリン女官長が急いで侍女たちを集める。

「母上様！あたくしはイヤですわ！」

プリンセスの叫びは、無情にもボタンと閉じたアーチ状の扉に遮られてしまった。

「ガイ！」

カグヤ姫は噛みつくように叫んだ。

「ちよつと来なさい！」

ブーリン女官長と侍女たちは王妃一行を見送るために部屋を出て行き、先触れ女官たちもその後を追うようにして消えると、カグヤ姫は唯一残った護衛隊長を呼びつけた。

「話があります！」

部屋の片隅に控えていたガイ・ド・プレイス男爵は、まるで風に

吹かれて影が動くような足取りで、プリンセスの手前に立った。長身長頭で、手足がすらりと伸びた非常に見栄えのする若者だった。着ている衣服は、首周りから手首までおおく黒布地の上等な上着と同じ色のズボン、その上に革の長靴を履いて、その裾を膝あたりで折り曲げている。両肩からは艶やかな漆黒色のマントを羽織り、腰にはひとふりの刀を帯びていて、それが王宮貴族であり、王宮士族でもあることを示していた。ルーフでも有数の名門家に生まれた貴族にしては質素な出で立ちだが、かもしだす雰囲気は洗練されたものだった。いつも黒色の衣装を身に着けているので、「黒の男爵」などのご令嬢方からは呼ばれているが、不思議なことに、誌的で端正な顔立ちには、十八歳という年齢を感じさせない匂いがあった。ガイは踵をあわせると、上背をかるく下げ、王女へ対する礼をした。

「姫君には、ご機嫌うるわしく」

「少しもうるわしくないわ!!」

プリンセスは深紅の扇をバチンと乱暴に閉じて、護衛隊長へその先を向ける。

「いったいどういうことなの!!」

カグヤ姫は苛立ちをあらわにさせた。王妃に教えられるまで、そんな海を渡ってやってきた得体のしれない占い師の存在など、全く知らなかったのである。

「なにがどうなっているのか、あたくしに説明なさい!!」

しかし、プリンセスの幼馴染みであり、十五歳の頃から護衛隊長を務めているガイは、平身低頭するでもなく、自分の胸あたりまでしかない己が姫君を平然と見下ろしていた。

「まことに申し訳ありません」

ちつともそう思っていない口調である。

「ですが、私の役目は姫をお守りすることであって、それ以上でもそれ以下でもございません」

「そんな馬鹿ないいわけはやめなさい!!」

カグヤ姫は癪癪を爆発させた。

「ガイの役目は、日々あたくしの周辺に気を使い、あたくしに及ぶようななんらかの出来事があれば、その正体を見極め、主人であるあたくしに伝え、力の限り補佐することでしょう！占い師が貴族の間で評判になっているのであれば、ガイも少しはその頭を働かせて、これはあたくしの一大事だと、どうして思わなかったの！何年あたくしのそばにいたと思うの！部屋の片隅に立っていて、母上様がケツコンケツコンと、にわとりの鳴き声のように唱えられるのをうんざりするほど聞いていたでしょう！！」

怠慢だわ、とカグヤ姫は胸の動悸を抑えながら唸った。まったくガイったら、相変わらずやる気がないんだから！

ところが護衛隊長は、プリンセスの激怒にもまったく動じていなかった。

「お言葉を返すようですが、姫」

辺りに散らばったプリンセスの怒号が跡形もなく消え失せてから、おもむろに水をうつたような静かな声が口をひらいた。

「王妃様がお話になった占い師でしたら、姫はもうすでにお耳になさっているはずですが」

「……なんですって？そんなわけないでしょう」

ガイったら、ひとつ歳をとってボケたのかしら。同い年のカグヤ姫は大まじめにそう思ったが、次の言葉にあ然となった。

「先日、イエンターゼ侯がバックリイ茶を献上なさったおりに、先ごろ噂になっている出来事として、数週間ほど前にブラック・ペリイ号に乗ってやってきたという一人の占い師の評判を話していかれました。その場には国王陛下や王妃様はもとより、姫も一緒に一緒にいたはずですが」

「……」

やや間をおいて、カグヤ姫はきれいにかたどられた顎を高慢げにあげると、深紅の扇をひとふりでひらき、風のようにかるい羽が激しく踊るぐらい左右に振った。いやあな顔をして、護衛隊長を睨ん

でいる。

そういえば、そうだったわね。

ようやく思い出したプリンスである。

「では、ガイも知っていたということね」

「はい」

その席でも王女の背後に影のごとく控えていたガイである。

「それなら、なぜなにも言わなかったの！」

再び爆発したカグヤ姫である。

「一言、あたくしにその占い師を調べてみますかとかなんとか、気をきかせるのがガイの役目でしょう!」

「ですが、もう手遅れかと思いましたので」

「なぜ!」

訝るプリンセスに、ガイはなんの抑揚もなく答えた。

「謁見のあとで、姫がご退出された後、候が国王ご夫妻になにやら耳打ちしておりました。洩れ聞いた話では、その者に姫を占わせてみてはどうかと提案されていたようです。候の言葉をそのままお伝えすれば、『このままでは、われらがプリンセスはイカズゴケになりますよ!』とのことですよ」

「んまあ!」

カグヤ姫は顔を真っ赤にして叫んだ。

「シンがそんなことを言ったというの!」

短気なカグヤ姫は、麗しきぬばたまのおぐしと称えられる黒髪をムチのように振り乱して、激烈に怒った。

「なんて無礼な!失礼な!あたくしはまだ十七よ!」

イカズゴケなんて言われるすじあいないわ!花もはじらう乙女によくも……!と歯ぎしりして、眉根を吊りあげて、靴のかかとでダッタン人のダンスのように床を踏み鳴らして、最後に持っていた深紅の扇をまっぴたつに割るところだったが、これは未遂に終わった。

「だいたいシンだって、二十歳になったくせに結婚もしていないじゃないの!」

あたくし知ってるわ!グレンナーダ卿のウーメと婚約したくせに、その妹のモーモと浮気したのよ!それがバレて、グレンナーダ卿に決闘を申し込まれたら、浮気は文化ですとかしらばっくれて、逃げ回ったんだわ!!かわいそうなウーメ!顔はかわいくないけど、気

持ちはよい子だったのに！これのせいで、すっかり男嫌いになって、世界独身連盟のルフ代表になったのよ！モーモだってかわいそうだわ！シンのせいで、すっかり悪女の代名詞になって、この間出版されてベストセラーになった『リトルルデーモンのような女』に実名で出てきたじゃない！モーモは名誉毀損で訴えているけれど、これもなにも全部シンのせいよ！まったく！弁護士ぐらい払いなさい！それに……あれに……これに……！

「姫」

ガイが静かに呼ぶ。カグヤ姫は釣り竿で引つ張られるように我に返った。

「一応ご忠告しますが、姫の今のお怒り、すべて口に出ておりまして」

「わかっています」

肩で息を切らしながら、なんでもないことのように壊し損ねた扇を乱暴にふる。ちなみにこの扇は、王家に伝わる七つの宝のひとつで、ルフ王国の守護獣「火の鳥」の羽でつくられたという伝説のものだ。この扇を持つ者は、次代のルフを統べる者の証なのである。

「だいたい、ガイも！」

怒りのおさまらないプリンセスは、自分の目の前で他人事のように直立している護衛隊長に八つ当たりする。

「どうしてその時に、あたくしの名誉を救わなかったの！イカズゴケなどと聞かされて、よくもなにもしなかったものね！」

あたくしの護衛隊長のくせに！怠慢だわ！と鼻息を荒くする。

しかし、その護衛隊長は、目鼻立ちが整った容貌のどこにも動揺を見せなかった。

「申し訳ございません」

先ほどと同様に、感情がこもっていない。

「つい、すっかりしておりました」

すっかりするな！とカグヤ姫はコブシをグーで握りしめる。

「本当にガイはやる気がないわ!!」

聞こえよがしに叫んで、靴音荒く窓辺に近寄った。王女の部屋の窓は上部がアーチ状になっていて、赤ワイン色の豪華なベルベット地のカーテンが垂れ下がっている。それは両脇で結ばれていて、緻密な波模様の白いレース地のカーテンが眩しい光をさえぎっている。カグヤ姫は左手でレースのカーテンを払いのけると、眼下を見渡した。ブランシェ城は王都の中心にあつて、周囲は貴族たちの豪華な館が囲んでいる。さらにそれらを囲むように、民衆の住まう街が広がっていて、遙か遠くまでその街並みが見える。その向こうには、ルーフのシンボルであり、黄金が埋まっているという不死の山が雄大にそびえたっていた。

なんてこと!とプリンセスは、硬い窓ガラスを叩き割って、雲ひとつない青空へ吠えたかった。母上様もひどいわ!でもシンの名前を出さなかったのは賢明ね。母上様のことだから忘れていたのかもしれないけれど。けれど結婚なんて冗談ではないわ。いいえ、それ自体やりたくないわけではないわ。あたくしは痩せても枯れてもこの王国の跡継ぎよ。きちんと相手を見つけて結婚はするわ。でもまだ十七なのよ。それなのに……

「ガイ!」

カグヤ姫はバチンと扇を閉じると、肩越しに振り返り、その場で微動だにしないでいる護衛隊長に命ずる。

「明日までに、その占い師を調べてきなさい!」

三日後と王妃は言った。時間はない。

「なんでもいいわ。とにかくその者に関することなら、全て調べてあたくしに報告しなさい。いいわね!」

念を押すと、ガイはひとつ頷いて、踵を返し、部屋から出て行った。

よし、とカグヤ姫は心のなかでガッツポーズをつくる。ガイはやる気はないけれど、命じられたことはそれなりにやるわ。

それから呼び鈴を鳴らして、侍女を呼んだ。

「今から口にする者たちを呼んできてちょうだい」
あたくしも負けないわ！

翌日、カグヤ姫が結婚相手を占ってもらったという話は、王宮中に広まっていた。

いつものように天蓋つきのベッドで目が覚めて、銀製の盥で顔を洗い、黄金のブラシで髪をすいて結いあげ、深いオリーブ色をした細長いドレスに袖を通して朝食のテーブルにつく頃には、そこかしこに散らばっていた噂話の破片が、姫君の耳元に否応なく挨拶していた。

今日の朝食は、蜂蜜をたっぷりとぬったパン、コーンとカブの入ったスープ、こんがり焼けた鶏肉、ベーコンとサラダ、デザートの餡蜜、食後のバックリイ茶だった。柿の絵が描かれた王女用のスパル皿がテーブルに並べられ、女官が料理を取り分けて王女の前に差し出すと、プリンセスは気がすまない様子で、パンを一口噛んだ。どうしてもため息が零れ落ちてくる。王宮中の召使たちの噂の的になっていると考えただけで、頭が爆発しそうになった。

なぜ、あたくしがこんな恥ずかしい目にあわなくてはならないの？

「姫君の結婚のためですよ!!」

プリン女官長が背後で叫んでいる。

「姫君の結婚の御ためにも、素晴らしいご衣装を選ばなくては!」カグヤ姫は鶏肉にブスツとナイフを突き刺した。いつもであれば、子供の世話をするように口うるさい女官長は、朝から走り回っている。何をしているのかと思えば、占いに出席するときのプリンセスの衣装のことで奮闘していた。カグヤ姫が一番目立つために、国王の侍従や王妃の女官たちへも使いを飛ばし、王女の衣装部屋にこもって、ああでもないこうでもないドレスの山を築いていた。

「なんといつても、姫様が主役なんですからね!」

プリン女官長の雄叫びを聞きながら、プリンセスは頭がズキズキと痛むのを堪え、早々に食べ終えた。

すると、それを待っていたように、三人の貴族の令嬢方が女官に案内されて部屋へ入ってきた。三人ともプリンセスと同じぐらいの年頃である。

絹のナプキンで口をふいていたカグヤ姫は、快く招きいれた。

「まあ、ようこそ三人とも。さあ、そこへお座んなさい」

三人のうち、手前にいた少女が優雅にドレスの裾をつまんで挨拶をした。

「王女様には、ご機嫌うるわしく」

「ありがとう、セラ。よく来てくれたわね」

トークン伯爵の令嬢セラは、花の蕾のような愛らしい表情に、王女の期待に立派にこたえたという満足感のようなものが浮いていた。プリンセスは昨日トークン伯爵邸へ使いをやり、占い師に関する話を要請、ほかに占い師を知っている者を連れて参上するよう命じていた。あとの二人は、トークン伯爵令嬢が連れてきたのである。

「キララット男爵の娘、ミーカでございます」

「ブルワータ將軍の娘、ユリでございます」

それぞれに挨拶を済ませて、プリンセスを囲むように三人は椅子に腰を下ろした。

「朝早くから呼び出してしまつて、迷惑をかけたわね」

まず三人を労うと、一斉に首が横に振られた。

「そのようなことはございませんわ。王女さまの将来のためならば、いつでも参上いたしますわ！」

カグヤ姫は、がつくりと肩を落とした。自分に関する話は何も伝えていないのに、三人とももう承知しているのである。今日はあたくしの占い話でお祭り状態だね。プリンセスはいまさらながら、ダイリン王妃を恨みたくなった。

「そう……今度あたくしのことで、色々あるようなのだけれど」
「負けられないわ、とプリンセスは決意も新たに、身を乗り出した。
「今、異国から来たという占い師とやらが、話題になっているよう
ね」

「はい、それはもちろんですわ」

と、トークン伯爵令嬢。プリンセスへの返答は自分の務めだというように張り切っている。

「わたくしたちの間で、それはもう大ブームでございます。なにしろ、あの方の占いは当たるとの評判でございますから！わたくしの知っている話だけでも、両手の指だけでは足りないほどですわ！ギヤルザード侯爵夫人が失くされた指輪を、侯爵夫人さまの義弟のベツドの上で見つけられたり、クリスター大司教さまの大切な杖を、下町の娼館で見つけられたりと、それはもう話題騒然ですわ！」

カグヤ姫は頭の痛みをこらえるかのようにしかめ面をした。不倫の証拠が発見されたり、神職のわいせつな行為が発覚すれば、それはもう話題沸騰だろう。

「あなたにも、いいことがあったそうね」

気を取り直して水を向けると、とたんにお喋りな令嬢は口をつぐんで、頬をポツと赤らめた。

「いやですわ、王女様。わたくしのことをご存知だなんて。恥ずかしいですわ」

「いいのよ、セラ。ぜひ聞かせてちょうだい」

はよ喋れとプリンセスは心のなかでせっついた。しかしトークン家令嬢は、これが深窓の令嬢のたしなみだというように、体をもじもじとさせ、両脇にいる二人の令嬢と視線を交わし、恋の噂に恥らう乙女となっている。もちろん、短気なカグヤ姫はイライラする。

「で、その占い師に占ってもらったのでしょう？良い方がすぐに見つかったそうだけれど、実際はどうなのかしら？ただの世間の噂なのかしら？」

埒があかないので、自分から話題をふると、トークン家の令嬢セラは、魂のスイッチが切り替わったかのように、がらりと顔色を変えた。

「いいえ！ただの世間の噂ではありませんわ！」

「そうですわ！王女さま！」

「セラさまは素晴らしい方と出会われたのですよ！」

両脇にいたご令嬢方も、いきなり興奮して口を挟む。トークン家令嬢は礼を言うように、二人へ頷いた。

「王女さまがご信じられないのも、無理ありませんわ。わたくしも王女さまと一緒に、殿方に縁がございませんでしたから」

余計なお世話だわ！とプリンススは青スジをひからせた。

「けれど、ミーカ様からくだんの占い師の話をお聞きしまして。それではと、父にお願いして屋敷へ呼び寄せてもらい、占ってもらいましたの。そうしましたら、そうしましたら……」

ここで、胸を両手で押さえ、息を思いつきり吸い込んだ。

「なんと、両思いでしたのよ！わたくしたち！！」

「なんて素晴らしいんでしょう！」

「羨ましいですわ！」

意味がわからないわ、とプリンススはくらくらしながら思った。

「王女様もご存知のように、わたくし、ササーラ伯爵様のご子息でいらっしゃられるタカト様に恋慕しておりました。いつも夜会や晩餐会でお会いしても、恥ずかしくてカーテンの隅からこっそりと見つめているだけでしたわ。わたくし、ご存知のように内気なものですから」

そんなの知らないわ、とプリンススはイライラしながら思った。

「ですが、その占い師に、誰か想う殿方のことを尋ねられた時、勇気を出して、タカト様のお名前を口にしましたの。そうしましたら、その占い師はタカト様にそのことをお話して……そうしましたら、なんとタカト様も、わたくしのことを想っていらして……そうしましたら、次の夜会でタカト様にダンスを申し込まれましたの……そうしましたら、タカト様は大変優雅にわたくしを導いてくださって……そうしましたら、ダンスのあとで庭園に誘われましたの……そうしましたら、そこで求愛されまして……そうしましたら、翌日に父同士が婚約を結んで下さって……そうしましたら……そうしましたら……」

カグヤ姫は扇を取り出してうんざりしたように振った。いつになったら、このノロケは終わるのかしらね。

「そうして、わたくしはめでたくタカト様と結婚することになった

のですわ！すべて、占い師のおかげですわ、王女様」

ようやく話の種が出尽くしたのか、感極まったかのように涙ぐみ、それにつられて同じように感動する令嬢たちである。

阿呆らし、とカグヤ姫は冷たく思ったが、気になることがあったので、気を取り直して質問した。

「両思いなのはわかったのだけれど、それは占ってもらったおかげなのかしら？」

「もちろんですわ！占い師はわたくしの言葉に、なにやら大きな水晶玉を取り出して、こう両手をかざして、呪文のようなものを呟いたのです。そうしましたら、透明な水晶玉が光り輝きましたの。すると占い師は叫びましたわ。『姫君、すぐにお相手の方にお会いしませんと！』と。あとで聞きましたら、占い師はタカト様とわたくしの未来を占ったそうで、結婚を暗示する予言が出たそうなのです！なんて素晴らしいんでしょう！」

セラ嬢はその時の様子を身振り手振りで表現する。

ふーむとカグヤ姫は考えた。

「その水晶玉が光り輝いて、占い師は相手の者に占った結果を話しに行ったというわけね？」

「そうですわ！」

ずいぶんとお節介な占い師なこと、とカグヤ姫は唸った。ただ占ってあればいいものを、わざわざ相手の男にも告げに行くなんて、あたくしの母君みたいねと、げんなりする。

「相手の者は突然のことで、驚かなかったのかしら？」

「それが、王女様！」

待っていましたと言わんばかりに、セラ嬢は目を輝かせる。

「確かにタカト様は驚かれたそうなのですけれど、わたくしと結婚するという占いの結果に勇気をもたれて、今まで告げられなかった想いを成就させようと、あとで教えて下さいましたの！なんて素晴らしいんでしょう！」

「……まあ、そうなの」

「そうですね！全て占い師のおかげですわ！わたくしの父も大喜びで、国王陛下の許しを得て、黄金をいくばくか与えようとなさったくらいですもの！」

「……まあ」

「ですが、占い師は欲がないようで、やんわりと断られましたわ。わたくしの幸せが実ったことで満足なんですって！なんて素晴らしいんでしょう！」

「……」

トークン伯爵家は黄金が埋まっているシロカネ山の管理を任されている。黄金は王家の直轄だが、ルーフ王国の重要な輸出品の一つである。

「良かったわね、セラ」

裏の言葉は、胡散臭いわねえ、である。

「ありがとうございます！王女様もぜひに、占い師に会われるべきですわ！」

やかましいわ、とカグヤ姫は憎たらしかった。

「その占い師なのだけれど、男なのかしら？」

「もちろんですわ！」

「詳しく教えてちょうだい」

「はい。歳の頃は二十代半ばと思われるすわ。占い師ですので、本当かどうかはわかりませんけれど。髪は夕日のように赤く、瞳は若草のような色をしております。背は高く、わたくしが会ったときは外国の方らしく、シルクハットの帽子にタキシード、白い手袋をしておりました」

きびきびと答えて、両隣の令嬢方と確認を取るように頷きあった。顔立ちはどうかしら？」

何気ない口調でプリンセスは言ったのだが、三人の令嬢はまるで示し合わせていたかのように口をそろえた。

「美形な方ですわ！」

さらに付け加える。

「黒の男爵様やイエントーゼ侯爵様と同様に、麗しい方ですわ！」
扇をひらいて、楽しげに笑いあう。だがプリンセスはあいにく感
動もなかった。

「それに、王女様。美形な殿方に目のないジイラス將軍様のご令嬢イズミ様が、その占い師を見初めてご自宅へ連れ帰り、ご自身を占つてみたところ、それが評判を呼んで、わたくしたちの間に広まったのですわ」

セラ嬢はとっておきの話であるかのように、含みを込めて喋る。

「王女様も、きつと氣に入られることですよ」

冗談じゃない、とプリンセスは苦々しく笑った。だいたいガイのどこが見目麗しいというのかしら。シンに至っては論外だわ。けれど、ちよつとは警戒したほうがいいわね。

プリンセスはしっかりと肝に銘じた。とりあえず占い師を知るために三人を呼んだのだが、もう十分だわと判断して下がらせようとした。だが、セラ嬢と一緒にいたミーカ嬢とユリ嬢は、血相を変えて立ちあがった。

「お待ちくださいませ！わたくしの話がまだですよ！」

「わたくしですよ！」

「セラ様のお話も、それは素晴らしいものでしたけれど、わたくしの話も、さらに殿方運のない王女様を感動させますわ！」

「そうですね！わたくしの話も殿方嫌いな王女様のお役に立つはずですよ！」

「どうかお二人のお話もお聞き下さいませ！殿方に好かれるわたくしたちの王女様になれるためにも！」

セラ嬢も拳を握って、力説する。

プリンセスのこめかみが、引き攣りまくったのは言うまでもない。

「ロイリートードと申す者です」

三人のかしまし令嬢たちが立ち去り、プリンセスがぐったりと椅子にもたれかかっていると、ガイが現れた。

カグヤ姫は目だけ動かす。

「それが、占い師の名前なのね？どこの者なの？」

「イングレス女王国です」

旧大陸に属する島国である。代々女王が統治している国で、ルフ王国と共に、世界島国連合の有力な加盟国である。

「雑誌の取材で、わが国へ入国した模様です」

「取材？」

「世界が誇る占い師が、世界の秘境を訪ねて回るという取材です」

「んまあ！」

カグヤ姫は跳ね起きた。

「なんて無礼な！わが国はジャングルのような秘境ではないわ！」

「似たようなものに見えるのでしょうか」

ガイは冷たく答える。

プリンセスは鼻を鳴らした。

「ずいぶんと、口が動くわね！珍しくことー！」

「その占い師に接触致しました」

えっ！とプリンセスは椅子から立ちあがった。

「それで、その者は今どこにいるのです！」

「王都の路地裏で、店を出しておりました。城下の者たちが長い列をつくっております」

「民衆たちが、外から紛れ込んできた占い師に殺到しているの？」

「はい」

「どうしてー！」

「姫を占うという話が……」

「もしかして、王都中に広まっているというのー！」

「……その話が、店先の看板に大きく書かれ、みなそれを読んで、集まっているようです」

「なんですってえー！」

カグヤ姫はゴリラのように鼻息を荒くして、テーブルに置いてあった扇をまっぴたつに割った。

「その者をひっ捕らえなさい！誰がそんな看板を出していいと許したのです！」

「ですが、事実ですので」

護衛隊長は無情だった。

「店は朝から盛況でしたが、昼の休憩に入ったところで、その占い師を捕まえました」

「それで！」

「速やかに、ここから立ち去るよう告げました」

「それで！」

「拒否されました」

カグヤ姫は膝からこけそうになった。

「その占い師の言葉をそのままお伝えしますと、『ぬばたまの姫君の将来を占うまで、僕は死んでもこの国を出ません！』だそうです」
「……もしや、それでのおめおめと引き下がったわけではないわよね？」

「無論です」

ガイは平然と頷いた。

「この国を立ち去れば、黄金をいくばくか与えると告げました」

「よくやったわ！」

プリンセスは先程の令嬢方の話をすっかり忘れて叫んだ。

「それで、出て行ったのね！」

「あっさりと拒絶されました」

プリンセスは二つに割った扇を振り回した。

「そこでどうして、素直に帰って来るのです！！」

「ですが、姫君。無理強いはよろしくはないかと……」

「ばか者！！」

カグヤ姫は扇をぶん投げた。

「お前は本当にやる気があるの！あたくしの身になって考えれば、他にもやりようがあるでしょうが！！」

「申しわけございません」

ガイは飛んできた扇を、首をひねって避けた。扇は背後の壁にぶつかって床に落ちる。

「お前はあたくしの護衛隊長でしょう！少しは頭を使って考えなさい！」

「申しわけございません」

ガイは棒読み口調で頭を下げた。プリンスはさらに頭にきた。お前は九官鳥かと怒鳴りつけたくなる。

「言っても聞かない。黄金にも応じないのであれば、無理にでも聞いてもらうしかないでしょう！」

カグヤ姫は両腕を組み、少し考えたあとで非情に言った。

「それはつまり」

「そう、つまり、あたくしの要望を必ず聞いてもらうようになさい。仕方がないわ、とプリンスは自分自身に頷いた。あたくしにもけなしのプライドはあるわ。世間の見世物になる気などないわよ。」

「わかったわね、ガイ」

「冷たい姫のお考えはわかりました」

「うるさい」

ガイがもつと身を入れて仕事をすれば、あたくしがひどいことを言わずにすむのよ！とプリンスは勝手に思う。

「いいわね、ガイ」

カグヤ姫はとりあえず畏まっている護衛隊長に、ひとさし指を突きつけた。

「面倒くさがらずに、きちんとあたくしの命令を実行するように！いいわね、と念を押すと、寡黙な護衛隊長はひとつ頷いて、踵を

返し部屋を出て行った。その黒マントに覆われた背中に、やる気を見せなさい！やる気を！と拳をグーにして叫ぶ。だが、その背中と入れ違うようにして、ドレスを着た大岩が現れると、プリンセスは口をあの字に開けた。

「さあさあ姫様、わたくしが選んだドレスを着ていただきますからね！」

後ろに、山のようなドレスを抱えた女官たちを引き連れている。

カグヤ姫はそれを見ただけでふらふらとなった。プリンセスの仕事も大変なのである。

翌日、王女の務めとして、父のゴダイゴ国王と共に臣下の謁見を受けていると、イエンターゼ侯爵が、控えの間で休憩している王女のご機嫌伺いに来た。

だが王女は素晴らしくご機嫌ななめだったので、機敏に察知した侯爵は早々に逃げ出した。

「何しに参ったのかと申しますと、近頃、わがバックリイの茶を狙う不届きな者どもがおりまして……、なにしろ、かの高名なイエン老人もお墨付きを与えたぐらいですから、海外へ持ち出せば良い値で売れるのでしょーうね、泥棒の諸君たちには……ふふふ、いや、失礼しました姫君」

幼馴染みの侯爵を見れば青汁を思い出すプリンセスの返答は、「あら、大変だわねえ」のつれない一言だった。

謁見が終わって、「いよいよ明日でござる」と嬉しそうに話しかけた父王を無視して、さっさと部屋へ戻ると、護衛隊長が待っていた。

「失敗致しました」

開口一番の言葉が、それだった。

「なぜ！」

「相手が強かったからです」

プリンセスは、女官が持ってきた冷たい葡萄酒が入ったグラスを、

あやうくひっくり返すところだった。

「ガイ！その腰にある刀は何のためにあるの！」

「これは、国王陛下への忠誠と、王家の方々をお守りするためにございます」

「それで、相手が強かったなどと言う気なの！ユキムラが泣くわ！」

ユキムラは、ガイの刀の銘である。有名な刀の一つである。

「申しわけございません」

プリンセスの怒りに対するガイの決まり文句である。

「夕刻、その店が閉まるのを待つて、占い師を待ち伏せし、再びこの国を出国するよう促しましたが、拒否されましたので、部下たちに捕らえるよう命じたところ、なぜか、みなその場から動けなくなりました」

「なんですって！？それで、どうしたの？」

「占い師は口笛を吹きながら、我々に手を振って去っていきました。すると、部下たちが動けるようになったので、我々も帰りました」

ガイは静かに言う。

「おそらく、あの者はただの占い師ではないかと……」

「そのようなこと、木から落ちたサルでもわかります！」

プリンセスは顔を真っ赤にして叫んだ。

「どうしてそこで、その占い師を追わなかったの！ただの占い師ではないとわかつているなら、なおさらその正体を掴まなければ！」

あたくしがいい見世物になるだけよ！と白い歯を食いしばる。

「わかつているの！」

「存じております」

ガイは冷静に頷く。

「調べて参りました」

そう言つて、小脇に抱えていた紙を差し出した。

それは四つ折りにたたまれた新聞紙だった。プリンセスは怪訝に思いながらも、それを手早く広げる。一面の上には『ワン・タイムス』と記されていた。世界で最も影響力のある新聞紙と云われている。

カグヤ姫は表紙に見入った。普通一面はトップニュースである。記事自体は外国語なので何を書いているのかはわからないが、記事についている絵の左側は、どこをどう見ても自分だった。

「これは何なの？」

「今朝の新聞です」

「……で、何なの？」

「明日の姫の結婚を占う記事です。記事の題は、『男性に縁がなかった東の果てにある神秘の国の姫君、ついに独身生活にピリオドへ占うのは、われらがイリュージョニスト！』です」

新聞紙を掴んでいるプリンセスの手が、酒に酔っているかのように震え始めた。トップニュースに見入る顔は、恐ろしい形相になっている。

「男性に縁がなかった？」

声が床下を這っているように暗い。

「独身生活にピリオド？」

新聞紙から、顔をグイッと引き上げた。

「われらがイリュージョニストですって！」

次には、新聞紙は天井を舞った。

「どうということなの！！ガイ！！」

「申しわけございません」

ガイは冷静に決まり文句で対処した。

「どうやら、この新聞社の者が、その占い師と一緒に入国していた模様です」

「ただちに追い出さない！」

「そのようなことをすれば、言論弾圧と訴えられる恐れが……」

「あたくしは名誉毀損で訴えます……！」

カグヤ姫は凄まじく吼えた。口から炎が出ないのが不思議なくらいだった。

「ガイ！お前は何をしていたの！こんな記事をむざむざ掲載させるなんて！」

あたくしは男性に縁がないわけじゃないわ！と叫んだ。許婚だつてちゃんとしたわよ！けれど相手がモノノケのようにあたくしを嫌がったから仕方がないじゃない！なにが独身生活にピリオドよ！あたくしまだ十七よ！

「姫、どうか落ち着いてください」

ガイの言葉で、プリンセスは我に返った。どうやらまた口に出して叫んでいたようだ。

「右側の絵をご覧下さい」

舞い落ちた新聞紙をいつのまにかき集めたらしいガイが、今度はその一枚だけを手渡す。カグヤ姫は掴み取って、自分の隣に描かれた絵を見た。その絵は男の顔で、斜め四十五度のポーズで、涼しげな眼差しをこちらへ向けている。髪は赤く、膚は白く、瞳は緑で、ゆうに美男子のカテゴリに入る資格を備えている。

「その者が、占い師ロイリートードです」

カグヤ姫は、絵に見入った。プリンセスもどちらかといえば面食いなのだが、この描かれた男は気に入らなかった。何が嫌かと言えば、自信たっぷりはこちらを見ていることである。まるであなたの全てがわかりますよとも言いたげに、口元に微笑を浮かべている。

なぜなら、私は占い師ですから

「そう」

カグヤ姫はようやく敵を見つけたとでも言うように頷いた。

「これが、占い師ね」

「そうですよ」

突然、若い男の声が聞こえた。

びつくりして、プリンセスは声のした方へ振り返った。が、すぐに視界が黒い色に遮られた。何かと思ったら、ガイのマントだった。「ガイ、下がって。見えないわ」

だが、寡黙な護衛隊長は主人の命令に従う気配がない。プリンセスは靴の踵を鳴らしながら、ガイのマントをよけて、自分が前に出た。

声が聞こえたのは、窓辺からだった。白いレースがかけられた両開きの窓は、かたく鍵が閉じられていた。だが、いつのまにか外のバルコニーへ開け放たれ、太陽の光を含んだ風が室内へ入り、プリンセスの髪に挨拶してゆく。

その風を従えるようにして、男がひとり、窓辺で片膝を曲げて頭を垂れていた。

「お前は……」

シルクハットの黒い帽子。赤毛の髪。黒いタキシードに、マント。白い手袋。革靴。目に入った一つ一つのパーツが、手の中の新聞紙の絵と合体した。

「お前が、ロイリートードね」

シルクハットの帽子を手前に脱いで、深々と下がっていた頭が、こくりと頷いた。

「初めてお目にかかります。ぬばたまの王女様」

涼しげな声を合図に、男は顔をあげた。

そこにいたのは、描かれた絵よりも華麗な男だった。

カグヤ姫は新聞紙を扇代わりにして、目の前の男を睨みつけた。まず背が高い。びつくりするほどではないが、後ろの護衛隊長とだいたい同じぐらいか。髪は短く赤毛。黒髪の人間しかないルーフが鎖国状態だったら、伝説の人食いオニと勘違いされただろう。それに白い肌。着ているタキシード。全身の姿は異国人そのもので、また非常に見栄えがよいというのが、プリンセスの率直な感想だった。だがやはり、好意的な感情は湧かなかった。その顔立ちが甘く

端正で、令嬢たちが黄色い声をあげただけのことはある。だが、そこに浮かんでいる笑みが気に入らなかった。まるで、私はあなたの全てを知っていますよともいうかのような傲慢な笑みが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9641f/>

カグヤ姫と占い師

2010年10月9日15時48分発行